

2021年7月18日 礼拝説教要旨

詩編講解説教69「無力の極みに」

詩編69：17～22、ヨハネ19：28～30

詩編第69編は「嘆きの歌」に分類されます。この嘆きの原因については19節に「敵」とあるように、その敵による嘲りを詩人は経験しています。「わたしが受けている嘲りを、恥を、屈辱を、あなたはよくご存知です。わたしを苦しめる者は、すべて御前にいます。嘲りに心を打ち砕かれ、わたしは無力になりました。望んでいた同情は得られず、慰めてくれる人も見いだせません」（20～21節）誰も同情してくれず、慰めてもくれない。詩人は一人孤独にこの敵の嘲りに耐えています。さらにこの敵の攻撃、嘲りは容赦なくエスカレートしていきます。「渴くわたしに酔を飲ませようとしませう」（22節）とあります。皆さんも経験があると思いますが、お寿司を食べると喉が渇きます。酔は渇きをもよおさせる。渴く者に酔を飲ませるとするのは、渇きに渇きを加えるということです。それゆえ詩人は「心を打ち砕かれ、無力になった」（21節）と言います。完全に心は折れ、無力になる。敵に向かって立ち上がる力はない。元の言葉は「病む」ということですが、病気をして力が入らない経験があります。この詩人は敵に打ちのめされ完全に立ち上がる力を失っている状態です。そこに罪に支配されている人間の姿が示されています。この敵というのはわたしたちにとっては、罪、サタンと理解してよいでしょう。

渇きで思い起こしますが、ちょうど今高校野球の県大会が行われています。以前は藤崎台の球場によく観にいきました。一昨年でしたか妻と二人で娘の学校の応援に行った。その日は猛暑日で熱中症で倒れた人を運ぶために救急車も入ってくるような日でした。わたしたちも熱中症対策で水分はとっておりましたが、帰りは二人ともフラフラでした。特に妻は熱中症一步手前で危なかった。水分は摂っているのですが、実際にはもっと渇いているのです。けれどもその渇きに気づかない。特に高齢者は渇きを感じにくいと言われます。だから喉が渇いていなくてもこまめに水分補給をするということがすすめられます。

わたしたちはそういう肉体の渇きを気をつけなければなりません、同時に霊的な渇き、魂の渇きのことも考えなくてははいけません。魂の渇きは気づきにくいゆえにより深刻です。カルヴァンはイザヤ書の説教の中で次のように述べています。「このことをよく覚えておきましょう。すなわち、わたしたちは渇いていて不毛であり、砂漠をさまよって歩くような哀れな人間であり、生気を取り戻すための水のひとしくさえ見出せず、力を回復するためのパンくさえ持っていないような、まったく霊的な良き物を欠いていることをです」罪に支配されているわたしたちはそういう状態にあるのです。これは自分では気づかない。自分の外側から客観的に指摘されないと、つまり神さまの御言葉に聴かないと気づけないことなのです。

アウグスティヌスが有名な『告白』の冒頭で「わたしたちの心は、あなたのうちに安らうまでは安んじないからである」と述べているのは的を得ています。人間は神さまに向けて造られました。神さまに「命の息」を吹き入れられて生きる者となりました。そこに魂の満たされた状態があります。しかしアダムとエバは罪を犯しました。それゆえに魂は神さまのものを離れてしまいました。そこからすでに人類の魂の渇きは始まっています。そしてその渇きに気づかないまま時を過ごしているのです。その魂の渇きが世の中の様々な罪の現実となって現れています。そのことは教会で御言葉を聴かない限り知ることはありません。そのようにして気づかずに魂が枯渇していくのです。それが敵、悪魔の狙いなのかもしれません。

けれども、この敵、悪魔の思惑は外れました。この魂が打ち砕かれ、無力となったわたしたちを神さまは決して捨て置かれません。わたしたちのところに神さまは来てくださったのです。

「わたしの魂に近づき、贖い、敵から解放してください」（19節）この祈りはキリストにおいて聴かれました。誰からの同情も慰めも得られず、一人孤独に耐えなければならない、そのところに神さまが来てくださいました。その無力の極みに神さまが限りなく近づかれた。それがキリストの十字架の御業です。「わたしが受けている嘲りを、恥を、屈辱を、あなたはよくご存知です」（20節）この嘲り、恥、屈辱をキリストが十字架で経験された。だからこそ「あなたはよくご存知です」と言うのです。

そして「人はわたしに苦いものを食べさせようとし、渴くわたしに酢を飲ませようとしています」（22節）この御言葉はまさに主イエスがあの十字架で経験されたことでした。「この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、『渴く』と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。そこには、酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソプに付け、イエスの口もとに差し出した。イエスはこのぶどう酒を受けると、『成し遂げられた』と言い、頭を垂れて息を引き取られた」（ヨハネ19：28～30）

ここでわたしたちはキリストが「渴く」と言われたことに注目しなければなりません。わたしたちの魂の渴きを癒し鎮めるお方がどうして渴くのか。それはわたしたちを贖われたからです。今日の詩編にも「贖う」（19節）という言葉が出てきます。これは「買い取る」という意味です。買い取るということは、買い取るものに対して代価を払うということです。わたしたちを罪の奴隷から買い取るために主イエスは何をされたか。ご自身の命を献げてくださった。ご自身の命を代価として支払われたのです。それゆえ主ご自身が渴かれたのです。そのようにしてわたしの魂に近づいて、わたしを悪魔という敵から解放してくださいました。

主イエスは言われました。「わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」（ヨハネ4：14）主イエスはその憐れみのゆえに、命を注ぎだして、わたしたちの渴きを癒してくださいました。このように主に渴きを癒された者は、その人自身が泉となって、誰かの渴きを癒すために仕えることができる。それが伝道、福音を伝えるということでしょう。霊的な渴きを潤され、自らがそのような御業へと召されていることを感謝しましょう。